

## 「木は地球を救う」 — 19

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

### 明治神宮 - 1

#### ◇崇敬会式典

6月25日明治神宮<sup>すうけい</sup>崇敬会の参拝の集いに参加した。崇敬会とは明治神宮にお参りする全国的な組織である。尚全国各地にある有名神社にはそれぞれに崇敬会組織は存在する。

式典では、「君が代」、「教育勅語」、「五か条の御誓文」(もう忘れかけていた)を会場の参加者全員で斉唱、朗読した。明治天皇が作られたこれらの3つを次号の巻末に添付します。3つは、現在でも十分に通用するもので、読者の皆様方のご参考に供すれば幸いです。

#### ◇神官の講話

お宮は来年令和2年(2020年)で100年になる。記念祭に備えて神殿工事中であったが7月末で工事完了。8月にご神体を仮殿から新設の本殿に移すとのことで、拝観したところ「仮殿と言っても、全て新材の香りプンプンの総ヒノキ造りである。これを仮殿と称しご神体を8月に移す」。と言うことは「この木の香が厳かに漂う総ヒノキの建物を取り壊すのか?」「まさか捨てるわけではないだろうが「木材や」として、この話は、なんとも勿体ない。やりきれない。」話だ。

仮殿の写真は撮影禁止でご紹介できず残念です。

#### ◇5月1日第126代天皇が即位され平成から令和の時代に入った。

戦後から平成の時代は、天災自然災害が発生し、被災地は大きな被害を受けた。上皇陛下は上皇后陛下とともに、被災地を訪れ国民を思い、国民に寄り添い、国民の為に尽くされた。

令和の時代に入ったが天皇陛下は上皇陛下と同じく国民のために尽くされると宣言されている。

#### ◇令和の由来

万葉集国民の和歌、抒情詩のなかで特に梅の花が尊ばれていた。

令和の命名には特に「梅花の歌」が選ばれた。

令和とは「時、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す」(淑気、<sup>かおら</sup>新春四辺に満ちている瑞祥(ずいしょう)の気。<sup>しゅく</sup>)

令和は英訳で「Beautiful Harmony」という意味で「素晴らしい調和」のとれたふさわしい良き時代となる。

#### ◇自然の森

式典は、厳粛なうちにも滞りなく終了、次は参道の玉砂利を粛々と進み、修復中の本殿の仮御殿にお参りした。

途中参道の両脇の森林を見ると、巨木は見当たらないが、適度の太さに成長している。針葉樹は「ほとんど見当たらず」柔らかな感じの広葉樹が立ち並んでいる。下草も生き活きと、ほどよい長さで伸び

ている。

広葉樹は、程よく素直に伸びて、細からず太からずの程よい太さに成長している。でかい巨木は見当たらず、「人の手が入っていないのでは」こんな森があるのか？まさに太古の森の再現か？しかも東京のど真ん中、明治神宮はいったいどんな手入れをしているのか。筆者は過去に何度もお参りしているが、初詣で参拝客が多く、人波に押され周囲を注意深く見る余裕もなく、うかつにも参道の両脇にある緑に目を向けていなかった。お恥づかしいことだ。“こんなことでは「木材や」と言えるのか”とまず自分を叱りつけ、猛反省をした次第である。

#### ◇明治神宮の森の沿革

柔らかな広葉樹林は、もしかしたら植林した人工の森かな。と思ったりもした。崇敬会の仲間にも聞いても関心のある人はおらず玉砂利の参道を歩くうちに、もしかしたら。もしかしたら、「植林したかも」の疑念が強くなった。その「もしかしたら」が当たりで、筆者が調べていくうちに、百年の年月が育てた人工の森であることが判った。

#### ◇明治神宮

明治天皇と正憲皇太后をご祭神とする神社である。明治45年(1912年)明治天皇が崩御され京都の伏見桃山陵に葬られたが、首都東京に神宮を建設したいとの運動が起こり、実業家渋沢栄一、東京市長阪谷芳郎等の有力者が中心となって、代々木の御料地に神宮建設の運動が起こり、大正2年(1913年)正憲皇太后が崩御された。大正天皇の裁可を受け大正4年(1915年)に、官幣大社明治神宮の創建することが内務省告示で発表された。明治の森はもともこの地(22万坪約73ヘクタール)は、江戸時代肥後藩主・加藤家の別邸であり、寛永17年(1640年)より、彦根藩主・井伊家の下屋敷となっていたものでこの土地が、明治7年(1874年)井伊家から政府に買い上げられ、宮内庁が所有する南豊島御料地(皇室の所有地)となっていた。現在の御苑一帯を除いては、ほとんどが畑であった。そして、荒れ地のような景観が続いていた。

#### ◇神宮の森

明治神宮にふさわしい自然の森を造る計画から、造林には3人の造林学者が挑戦した。もともこの



現在の森 (全体)



太古の森の再現



荒れ地のような景観

地は荒地であり、ここに「自然の森をつくろう」という計画自体が大変な難題であった。この難題に挑戦したのが、日本林学博士で公園の父と言われた本多静六であり、その弟子本郷高德、上原敬二の3人の学者が挑戦した。目指したのはもともとこの地にあったはずの原生林である。

筆者、ちょっと待ってください。もともとこの地にあったというが、この地はこの時点で写真で

は「荒れ野ヶ原」、即ち何もない荒野である。となればいつ頃の時代を再現しようというのか？誰も知らない原生林、まさか太古の森、地球誕生時代の森を再現しようというのか？と疑問に思った。モデルはどんな森か？

ところが調べていくうちに、ここで言う太古の森とは、日本各地や海外からの、献木365種約12万本が計画的に植えられた。「神社の森は永遠に続くものでなければならない。それには自然林に近い状態をつくり上げることだ」を骨子とし、「永遠の森」を目指した壮大な計画のもとに大正4年(1915年)から造営工事が始まる。当時明治神宮の森づくりに関わった人々は、“どんな思いで、自然の森をつくろうとしたのか。思いを知りたい”。尚、昭和45年(1970年)の調査の時点では、247種17万本となっており、「造林学者の思い」のとおり森が育ったことが証明されている。

#### ◇海の森公園

前号で、植樹後の森の手入れとして、オイスカと東京都港湾局共催の下刈りに参加した。明治神宮の森を眺めているうちに、百年後は明治の森のような姿になっているのではと想像した。しかも明治神宮は内陸部の中心地だが、海の森公園は臨海部の中央防波堤の内側にあり、しかもゴミで埋め立てたりサイクルアイランドである。単純に比較はできぬが100年後の東京湾の海の森公園が、明治神宮の森のような姿になっているのかな。植えられた苗木の樹種も違うかもしれぬ。次号で比較して調べてご報告する。いずれにしても、想像するだけでも夢のある楽しいことだ。

100年後にこの目で確かめたいものだ。

明治神宮-2へ続く



3人の造林学者



100年前の荒野



現在の森